

生活リズムを立て直す支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生である。1 年生の 2 月に 1 週間欠席が続き、ネット依存による昼夜逆転生活となっていた。ネット上の友達との交流が楽しく、学校への関心が低下している。また、携帯電話をめぐり、保護者との関係が悪化した。保護者は別室登校が長期化したことによる、学習の遅れを心配している。

具体的な取組

○支援会議の開催・校内協力体制の構築
不登校対応巡回教員の勤務日に支援会議を開き、校長、副校長、養護教諭、特別支援コーディネーター、学年担当、S C、特別支援教育専門員などとの連携により、毎週情報交換を行った。

また、会議内容については全教職員に周知し、協力体制を構築した。

○不登校生徒の情報収集及び統一した対応
アセスメントに必要な情報を収集した。生活リズムを整えるために、生徒のできることから始めた。多くの教職員や S C が連携し、給食の受け取りや体育の授業、行事への参加など、心理面、学習面の支援を進めた。



○S C との連携

欠席が続き始めてすぐに S C との面談の機会を設け、別室登校につなげた。その後、週 1 回のカウンセリングを続けた。本人の不安や状況、親との関係の確認、自己理解を促すことなどを目標に実施した。また、保護者との面談も継続して実施した。

○不登校生徒への働きかけの強化

教科担当が出す課題や生徒持参の課題を中心に、別室での学習習慣を整えた。進級時に担任を変えることで、職員室を該当生徒が身近に感じてもらえるよう、職員からの声かけを増やした。担任や登校支援員が、学校行事や授業への取組を支援し、参加を促した。

成果

毎日 1、2 時間の別室登校ができるようになった。定期考査を教室で受け、運動会や職場体験に参加した。S C 面談では、「進路について親との意見の相違がある」などの内面的な葛藤も吐露できるようになった。本人との人間関係づくりが支援のカギとなった。

課題

当該生徒の目標や将来の夢を否定せず、気持ちを聞くことができる関係を途絶えないようにする。

S Cや特別支援教室担当教員を含めた組織的対応に基づいた、全ての教員による学習環境の調整と一本化した指導の実施について

不登校生徒の状況

対象生徒は、入学時から学校の集団活動に適應することが困難であり、不登校傾向が続いた。保護者と担任で、繰り返し、改善に向けた面談等を行ってきたが、改善には結び付かなかった。

具体的な取組

○教育相談部会における当該生徒への対応の一本化

教育相談部会において不登校傾向がある生徒を中心とした支援表を作成し、担任、養護教諭、特別支援教室担当教員、S Cを交え、それぞれの立場から生徒に対するアプローチのアイデアを出し合い、対応の一本化を行った。

○S Cの積極的な活用

S Cと教員間の連携をこまめに図り、生徒への対応に関する助言に基づいた取組を積み重ねた。校内委員会を実施し、生徒の実情に応じてきめ細やかな対応を心がけた。生活指導担当の主幹教諭を中心に、小さな事柄から速やかに校内委員会を実施し、早期から改善に向けた対応を行った。

○ユニバーサルデザインに関する継続的な校内研修の実施

各教室の工夫や教材の工夫など、全教員が共通して改善が図られるように研修するとともに、全ての生徒の困り感を全ての教員が理解し、生徒に適切かつ必要な支援が行えるようにするための研修を毎学期実施した。

○S C及び特別支援教室担当教員と事務主事や経営支援部との協働による学習環境の調整

別室登校用の学習空間のレイアウトやインテリアなどについて、S Cや特別支援教室担当教員から助言を受け、事務主事や経営支援部の教員が不登校生徒に優しい学習空間を創出できるよう改善した。



成果

S Cから教員に対し適切な助言をもらうとともに、特別支援教室拠点校の強みを生かし特別支援教室担当教員と組織的に対応してきた結果、当該生徒は、1年生の3学期ごろから徐々に登校回数が増え、2年生の途中には不登校が解消するに至った。

課題

若手教員と経験年数の多い教員で、不登校に対する理解や考え方にギャップがあるため、引き続き研修が必要である。

自信につながる活動を通し学校での滞在時間を増やす支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生であり、5 月から徐々に欠席が増え始めた。母との関係性について悩み、欠席が増えるにつれて、学習への遅れも顕著になった。

また、得意、不得意の差が大きいことが、学習や人間関係に影響を及ぼしている。

具体的な取組

○支援会議の開催・校内協力体制の構築

不登校対応巡回教員の勤務日に支援会議を開き、副校長、養護教諭、生活指導主任、特別支援コーディネーター、学年主任、SC 特別支援教育専門員などとの情報交換を毎週行った。また、支援会議の内容は、全教職員に周知し、校内協力体制を構築した。

○SC との連携

保護者との関係性について、生徒と SC が定期的に話す機会を設け、不安を受け止め、さらに対処法を一緒に考える時間をつくった。また、教育センターの教育相談へつなぎ、WISC の結果をフィードバックし、苦手の克服のための効果的な手法の助言が得られた。

○不登校生徒に対するアセスメント

職場体験では、支援会議や学年職員によるアセスメントを基に、趣味が合い、友好的な関わりができるメンバーと同じ体験先になるよう配慮した。職場体験先への事前訪問の際、教室に入ることはできなかったが、一緒に行く生徒と自然な形で合流できるように配慮した。

○不登校生徒への対応の強化

当該生徒は、書く作業や整理整頓が苦手で忘れ物も多く、困り感があった。支援員や担任が個別に対応することで、提出物を仕上げられるようになった。担任の働きかけにより、合唱祭への参加もでき、体調や教科の内容によっては、授業にも参加できるようになった。



成果

7 月頃には登校できない状態が続いていたが、別室利用を開始し、不定期ながら月 3～5 日程度、自分の意志で登校する姿が見られた。職場体験や合唱祭への参加ができた。事前の準備や練習を行うことが参加につながった。

課題

別室での学習計画を自ら立てることが難しく、本人に提示したもののから選べるようにした。今後は、自分で意志決定できるように支援する。

オンラインや支援員等による校内別室の充実について

不登校生徒の状況

対象生徒は、教室での授業参加が困難な生徒であり、本人・保護者の申し出により別室登校となった。授業に参加ができないだけで、朝と帰りの学活や、給食時には教室に行くことができる生徒である。

具体的な取組

○別室でのオンラインによる授業参加

教室に配信用タブレットを設置し、校内別室で、オンラインでの授業視聴をできるようにした。他の生徒も別室にいるため、ヘッドセットを装着するようにした。

○登校支援員のサポート

登校支援員を配置した。登校支援員は、校内別室内の環境整備、学級担任や教科担当との連絡を行うようにした。

また、校内別室内における、その日の給食の必要食数の連絡を、各学年に行うようにした。

○タブレット端末を活用した個別学習

校内別室内にブースを設け、各自が集中して学習できる環境を設けた。また、ヘッドセットやACアダプターを用意し、学習者用タブレット端末を活用して、学習できるようにした。

○学習補助員による学習サポート

各教室だけでなく、校内別室に学習補助員を巡回させ、不登校生徒の質問に対応できるようにした。



成果

別室登校できる仕組みを整えることで、生徒の居場所を確保するとともに、登校時間が安定するようになり、毎日登校できる生徒が増えた。校内別室の使用を申請している生徒のうち、8割の生徒が毎日登校している。

課題

教室に復帰するタイミングやきっかけをうまく作ることができるように、方策について検討する必要がある。

別室登校と教室復帰に向けての取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校高学年から不登校になり、保健室登校をしていた。中学校に入学し、教室に復帰したが、1年生の1学期後半から欠席や遅刻が増え、SCに当該生徒と保護者をつなげた。2学期には別室登校を提案し、2年生の現在、別室登校から教室復帰に向けて取り組んでいる。

具体的な取組

○別室対応による不登校生徒の支援

定期的に登校するため、担任や登校支援員と一緒に、教科の課題や自分が持参した課題を行ったり、学習の機会を確保できるように、学習支援を行ったりした。

また、登校支援員と教室前の廊下まで行き、学級の様子や授業の進行を確認し、教室復帰に向けて取り組んだ。

○継続的なカウンセリング

相談するための場として、1年生から継続的に、当該生徒と保護者に対して、SCによるカウンセリングを実施した。担任や養護教諭、SC、登校支援員が連携し、情報交換を行うことで、当該生徒が安心でき、無理のない登校支援を心がけた。

○関係機関との連携

別室登校とカウンセリングを行ってきたが、生徒に勉強したい気持ちが出てきたため、教育支援センターにつながった。教育支援センターの職員や不登校対応巡回教員、担任、養護教諭、登校支援と情報共有しながら、連携を深め、スムーズに入室できるように努めた。

○学年・学級づくり

学年において、居場所づくりの推進として、SSTを行った。2～5人でグループになり、相手に言葉で伝える取組やグループでコミュニケーションを取る取組を行った。



成果

生徒は人とのコミュニケーションをとることに、不安が大きかったため、教員やSC、登校支援員などが継続して関わるようにしたことで、安心して別室登校できるようになった。継続的な保護者への支援も、本人の登校への意欲につながる事ができた。

課題

教室復帰や進路指導に向けてのタブレット端末を活用した支援や、学級の友達との関わりについて、検討する必要がある。

不登校対応巡回教員、SC、SSW等との連携について

不登校生徒の状況

対象生徒は、1年生の4月下旬頃から不登校になった。友人との関係もよく、担任とも関係性が築けていた。1学期は、担任と話すために短時間登校することができていたが、2学期以降は電話でのやりとりが中心となった。

具体的な取組

○支援会議の実施

週1回、管理職、各学年の不登校担当教員、養護教諭、SC、不登校対応巡回教員が参加する支援会議を開催した。各学年の不登校生徒の情報を共有したり、具体的な支援の方法について検討したりした。

○不登校生徒情報収集、校内での対応

支援会議で検討した内容を、校内で共有した。学年の教員、不登校対応巡回教員、SCが、具体的にどのように生徒と関わっていくかを検討した。不登校対応巡回教員が橋渡し役となり、情報交換、情報共有を行い、他の区立中学校との連携、外部関係機関との連携につなげた。

○SSWとの連携

当該生徒と学校との関わりは継続しているが、保護者と連絡が取れないことから、SSWにも情報共有し、連携した。他の区立中学校へ通う妹も同様であるため、SSWに家庭訪問を要請した。また、家庭内が落ち着いて生活できる環境ではないことから2校で連携してケース会議を実施し、対応を検討した。

○別室対応による不登校生徒の支援

登校支援員を配置し、毎日9時～14時で、「校内教育支援センター」を開室した。落ち着いた学習環境、個人や小グループのスペース確保等、生徒が登校しやすい教室づくりと、巡回教員による週1回の学習指導を実施した。



成果

不登校対応巡回教員、SC、担任の連携により週1回の家庭訪問を行うことで、本人との関わりは増えた。家庭訪問をする中で、月に数回は一緒に学校へ来ることもできた。SSWとの連携し、本人だけでなく、保護者への支援も進めた。

課題

本人の登校意欲の向上を図るための支援だけでなく、家庭との連携が必要不可欠である。

学校・友達とのつながりについて

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校から別室登校をしていた。中学校入学後、心機一転し、学級に入って登校していたが、集団生活に対する不安感が強くなり、1学期後半から登校しづりが始まった。部活動での活動は楽しく、友達との関係も良好であったため、別室登校と放課後は部活動に出て友達と帰宅することを続けている。

具体的な取組

○オンライン授業への参加

校内別室でオンライン授業を受け、そのまま放課後に部活動に参加した。SCや養護教諭、登校支援員が関わり、対応することを継続した。担任や登校支援員、部活動顧問との連携を密に行い、生徒理解に努めた。

○オンライン面談の実施

当該生徒が登校できないときは、オンライン面談を実施した。音声のみのときもあったが、担任が顔を見ながら話をするときもあった。学校とのつながりを保つようにするとともにオンライン上で課題のやり取りも行った。



○保護者との連携

当該生徒の保護者への連絡は担任が定期的に行った。家庭と学校が連携を図り、当該生徒の教室復帰に向けて、今後の対応について検討した。

○外部関係諸機関との連携

当該生徒と保護者は、教育センターでカウンセリングを定期的に行っており、担当SCと不登校対応巡回教諭が連絡を取り合うようにした。当該生徒の学校での様子やカウンセリング時の様子を共有し、今後の対応について検討した。

成果

学校や友達とのつながりを大切にして、当該生徒にとってよりよい環境づくりができるようにした。教育センターのSC、校内の支援員など、多数の人々との連携を図ることで、多面的な支援ができた。週1、2日の登校が、週4、5日に安定してできるようになった。

課題

授業や指導など、教職員が対応できないときがある。教室復帰の準備として、学級の生徒の理解を深めることが課題である。

「学校に登校できた」という自信につなげる支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、2年生である。1年生の2学期に友人関係のもつれから登校しぶりが始まった。2年生の5月頃に同級生とのトラブルから精神的に傷付き、欠席が続くようになった。登校する意欲はあるが、持病から体調面に不安がある。また、特定の友人との接触に対して精神的な不安が残っているため、教室に入ることができていない。

具体的な取組

○支援会議での情報共有

毎週行われる支援会議は、管理職、生徒指導主任、特別支援コーディネーター、養護教諭、学年主任、SC、不登校対応巡回教員で編成した。支援の方向性の検討や効果の確認、支援内容の修正などを行った。校内で情報共有し、統一した対応につなげた。



○生徒本人と保護者への対応の強化

校内別室の利用を始めた。肯定的な言葉がけを続け、教員や支援員との信頼関係を再構築した。体調やメンタル面の不安の軽減を目指し、保護者との協力によって環境整備を行った。登校時や自宅での様子など、保護者との情報共有により臨機応変な対応を目指した。

○SC・医療との連携

月1回程度、SCとの面談を継続して行った。当該生徒に対して、友達との関わり方への傾向を知り、自己理解を深めることから人間関係の改善の糸口を探った。メンタルケアを図り、内容は担任と共有した。また、持病の治療を通して、体調面の改善も進めた。

○生徒意識調査の分析と活用

不登校対応巡回教員の助言により、生徒意識調査を実施した。結果の分析によって、①ほめる種をまく②生徒の発言を共有する場面を意図的に作る③自分の意見を持つ場面を設定する④授業に安心して取り組めるだけの基礎学力を補うなどの課題が見付かった。

成果

教室に入ることを前提としていた時期は、体調不良で毎朝登校できなかったが、別室登校が決まってからは毎週火曜日に登校し、1時間別室で授業を受けることができるようになった。現在は、登校日数や在校時間を増やし、火・木・金に4時間、別室で授業を受けられるようになった。

課題

教室で授業を受けることに対して不安が残っている。そのため、メンタル的なケアと学校で授業を受けやすくなるように環境整備をする。様子を見つ、適切な支援を心がける。

好きなことから自信につなげる支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学 2 年生である。入学当初はなんとか登校できていたが、人が多く集まる場所が苦手で自分から会話に入れない。学習への興味が低く、やりたくないことには取り組まない。徐々に登校を渋るようになり、登校できなくなった。生徒は自分の気持ちを語らないが、保護者と担任の連携はできている。

具体的な取組

○情報収集及び校内で統一した対応

アセスメントにより別室登校を促し、リモート授業による学習支援、コミュニケーショントレーニングの実践、小集団での活動や運動の時間の設定、行事に向けた配慮など、生徒への無理ない対応を計画し、支援を進めた。

○不登校生徒への支援

別室登校は週 2 回実施した。その日の学習や行動計画に基づき生活し、振り返りシートに記録するようにした。手芸や絵、教科担当から渡される課題に取り組む「個人で学習する時間」、小集団活動として会話ゲームやバスケットボールなどを行う「関わり合いの時間」を分けて設定した。

○教室復帰後の支援

担任や友達が、帰りの会や昼休みなどの時間に、別室登校している当該生徒に関わった。担任は学級の様子や取り組んでいることを伝えた。友達とは、好きなことを話すなどして過ごせていた。また、職場体験や社会科見学などの校内行事に誘われる様子が見られた。

○不登校に関する校内研修の実施

「不登校における早期支援」の強化を学校の重要課題とし、不登校対応研修ミニキットによる研修を実施した。研修を通して「児童・生徒を支援するためのガイドブック」や、研修ビデオについて、不登校対応巡回教員と情報共有を行い、必要に応じて利用した。



成果

当該生徒は、1 年生の後半は不登校状態であったが、別室登校を勧めた結果、週 2 回は登校できるようになった。登校支援員や他の別室利用生徒とコミュニケーションがとれるようになった。また、別室内でお菓子作りのレクを企画し、協力して進めることができた。

課題

学習に対する苦手意識が強い。好きな教科から学習につなげたい。学習面で、どのように自信を付けさせるかが課題である。

生徒が安心して登校できる環境づくりについて

不登校生徒の状況

対象生徒は、教室の中に入ることができない。その理由として、「集団の中に入ることができない」、「学習についていけない」等を挙げている。学校では、当該生徒の家庭環境を踏まえて、居場所づくりに力を入れ、不登校状態の解消に向けて取り組んでいる。

具体的な取組

○明るい別室の環境

校内別室にはなるべく物を置かないようにし、開けた明るい環境づくりに力を入れた。当該生徒が登校した際、生徒と先生が開放的な気持ちで話ができる雰囲気づくりを意識した。



○個別で学習に取り組める環境

別室登校した生徒一人一人が個別に学習へ向き合えるよう、多く配置した。生徒の状況によっては、机をパーティションで囲み、個室にできるように配慮した。



○複数の登校支援員を配置

校内別室を利用する生徒の特性に合わせて、複数の支援員を配置している。男女の性別はもちろんであるが、支援員との相性も考え、支援員を曜日ごと異なる方にし、同じ日に複数配置するなどの工夫を行っている。

○校内別室のフロアを重視

校内別室は1階昇降口の付近に設置し、他の生徒を気にせず、校内別室を利用できるようにした。また、校内別室近くに保健室を配置し、生徒のメンタル面に早急に対応できる体制を構築した。

成果

校内別室を毎日開室し、内容を充実させることで、これまで学校へ来られなかった生徒が学校へ来られるようになった。また、教員や他の生徒とのコミュニケーションの機会が増えたことによって、安心して登校できる環境が整えられた。

課題

学校へ登校することはできるようになったが、別室のルールなどを守れるようにすることが課題である。